

修士論文（要旨）

2014年1月

目標言語環境における言語学習者のスピーキングを妨げる要因
—他者との関係に着目して—

指導 齋藤伸子 教授

言語教育研究科

日本語教育専攻

212J3010

河野有紀

目次

第1章	はじめに	1
1.1	研究背景	1
1.2	研究目的	1
第2章	先行研究	2
2.1	学習者が影響を受ける情意要因	2
2.2	学習者が影響を受ける環境要因	4
第3章	予備調査	6
3.1	目的	6
3.2	概要	6
3.3	結果	6
第4章	本調査概要	7
4.1	調査協力者	7
4.2	調査方法	8
第5章	5人のストーリー	9
5.1	BFのストーリー	9
5.2	CFのストーリー	17
5.3	KFのストーリー	24
5.4	AMのストーリー	29
5.5	JFのストーリー	34
第6章	考察	42
6.1	母語話者との人間関係の構築	42
6.2	対人不安	45
6.3	動機づけ	46
6.4	日本語学習者と英語学習者	49
第7章	提言	50
7.1	受け入れ機関への提言	50
7.2	送り出し期間への提言	50
7.3	教師への提言	51

参考文献

キーワード

【目標言語環境 スピーキング 人間関係の構築 対人不安 動機づけ】

要旨

言語習得において目標言語環境での生活は効果的だと言われており、特にスピーキングを中心としたコミュニケーション能力の伸びが期待されている。しかし、留学を終えた学習者がどの程度成果をあげたかについては、曖昧にされていると感じる。稿者は、自身の留学経験から、目標言語への苦手意識を拭えないまま帰国する学習者が多いと感じた。実際の言語能力の伸びに個人差があっても、使用機会を得ることで言語使用に自信を持てるようになることが重要だと考えるが、その機会を無駄にしてしまう者もいるというのが現状である。このような問題意識をもとに始まった本研究の目的は、学習者のスピーキングを妨げている要因は何か、また、その要因を取り除くために周りができることは何かを探ることである。

まず予備調査として、17名の日本語学習者に対して質問紙調査を行い、本調査協力者を選定した。本調査では、多様な学習者の個別性要因(林、2006)に目を向けるため、国籍や学習歴の異なった日本語学習者4名に対して、母国の大学や日本語学校など、学習段階別に分けてインタビューを行い、それぞれの言語学習ストーリーを作成した。本調査協力者の選定方法として詳細な基準は設けていないが、複数の日本語学習段階や留学経験を持ち、上級日本語学習者を対象とするために日本語能力試験N1またはN2保持者とした。また、研究に客観性を持たせるため、ほぼ同様の条件で日本人英語学習者1名に対しても調査を行った。インタビューでは日本語を使用した。

インタビューデータからそれぞれの言語学習ストーリーを作成し分析した結果、学習者のスピーキングを妨げる要因として、①「母語話者との人間関係の構築」、②「対人不安」、③「動機づけ」という三つのキーワードが浮かび上がった。まず、①「母語話者との人間関係の構築」であるが、母語話者とのネットワークの必要性が感じられないこと、母語話者へのイメージが実際使用場面に影響を与えること、母語話者に対してWillingness to Communicate(他者と対話する意思)が高まらないことが原因で、人間関係やネットワーク構築の問題でつまづいてしまう。目標言語環境で生活をして、目標言語使用機会を得ることができていないのである。②「対人不安」に関しては、言語使用相手と、学習仲間、母語話者教師という三つの対人関係から分析を行った。③「動機づけ」では、自己決定性の低さと目標のあいまいさや、学習の成果を何に帰属させているかが学習者の動機を弱める要因となっていた。最後に、日本語学習者と日本人英語学習者の比較として、民族言語的バイタリティーの差と、受け入れ環境の差について述べたが、彼らのストーリーから得たコミュニケーション意欲阻害要因に関しては共通する部分も多く、同様に改善していくことができると考えられる。

最後に、本調査で浮かび上がった学習者のコミュニケーション意欲阻害要因を踏まえ、受け入れ機関、送り出し機関、教師が行っていくべきこととしていくつかの提言を行った。具体例としては、受け入れ機関に対しては学習者のWTCを高めるため、母語話者との有意義な接触や、目標言語コミュニティへの所属を支援することがあげられる。送り出し機関は、帰国した学生

と共にプログラムを振り返り、自律的な学習が行えるように常に改善を行っていくことが必要である。教師は、学習者と「人間と人間」としての関係を築くことや、目標言語環境ならでの学びの機会を与えることが重要である。学習者のコミュニケーションを支援するためには、単独の一時的な支援ではなく、各方面からの継続的な支援が必要なのである。

参考文献

- 小林明子(2006)「第二言語教育における Willingness to Communicate に関する研究の動向」
『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部、55、広島大学大学院教育学研究科、285-293
- 林さと子(2006)「第二言語学習と個別性—ことばを学ぶ一人ひとりを理解する—」春風社
- 原田登美(2010)「日本語学習者と英語学習者の留学動機—留学は第二言語学習と自己形成にどう影響するのか—」『言語と文化』14、甲南大学、179-201
- 廣森友人(2003)「学習者の動機づけは何によって高まるのか—自己決定理論による高校生英語学習者の動機づけの検討—」『JALT Journal』25、173-186
- 元田静(2005)「第二言語不安の理論と実態」溪水社
- 望月通子(2008)「複合環境における第二言語不安」『関西大学外国語教育研究』16、関西大学
13-25
- 守谷智美(2004)「日本語学習の動機づけに関する探索的研究—学習効果の原因帰属を手がかりとして—」『日本語教育』120、日本語教育学会、73-81
- 八島智子(2004)『外国語コミュニケーションの情意と動機—研究と教育の視点』関西大学出版部